

書 評

高橋春成 編

『日本のシシ垣—イノシシ・シカの被害から田畑を守ってきた文化遺産—』

古今書院 2010年12月 358頁 5,500円+税

日本各地の農山村地域には、主に近世に築かれ、イノシシやシカの害から田畑を守ってきた「シシ垣」が、人知れず眠っているという。本書は、そのシシ垣の保存と活用を目的とする、「シシ垣ネットワーク」の活動成果をまとめたものである。20名の執筆陣は、地方自治体の鳥獣害対策担当者や文化財担当者、自然保護団体や文化財保護団体の役員、大学教員など多岐にわたる。事例地域も、東は群馬県から西は沖縄県まで幅広い。

本書の主な構成は、以下の通りである。

- 第1部 先人の遺産「シシ垣」
 - 第1章 シシ垣の分布と構造
 - 第2章 猪鹿垣遺構を残し伝えるために—香川県小豆島をめぐる猪鹿垣群の踏査と実測の記録
 - 第3章 農民の苦闘を語る砦—三重県紀伊長島の猪垣
 - 第4章 亜熱帯の森に眠る猪垣—沖縄県西表島の猪垣の配置形態と構造
 - 第5章 近江に築造されたシシ垣—滋賀県高島市の遺構
 - 第6章 安芸のシシ垣と地域の歴史
 - コラム1 世界遺産「熊野古道」を取り巻くシシ垣群
- 第2部 シシ垣の保存と活用
 - 第7章 滋賀県比良山地山麓の土石流災害対策を兼ねたシシ垣とその保存
 - 第8章 岐阜県根尾谷のシシ垣と活断層調査における活用
 - 第9章 群馬県の猪土手—チーム“ししどって”の調査から
 - 第10章 沖縄島奥集落の猪垣保存活動
 - 第11章 福井県奥越地方のシシ垣遺構探しとエコツアー
 - 第12章 伊吹山の峠に残るシシ垣の保存活動

コラム2 里山イベントにシシ垣を活用

第3部 シシ垣を調べる

第13章 シシ垣に類似する自然地形

第14章 発掘調査からみたシシ垣

コラム3 東京都西多摩地方に残る猪堀跡

第4部 現代のシシ垣

第15章 島根県の広域防護柵とその効果

第16章 住民の合意形成によって被害防止柵をつくる—現代版のシシ垣づくりにむけて

コラム4 大阪大都市圏に増えている被害防止柵

まず第1部では、シシ垣の現状と歴史が各地の事例をもとに述べられ、近世の在地文書にも必要に応じて言及されている。

第1章(矢ヶ崎孝雄)は、木柵・土塁・石塁などの伝統的なシシ垣の全国分布と、その地域的背景について述べた総論である。分布空白域の理由の一つとして、鉄砲を所持する郷土を農村部に配置した旧藩の存在を指摘するものの、近世信州の詳細な分布図では、鉄砲の分布地にもシシ垣が分布する例が少なからず存在したようにも読み取れ、全体の論旨にやや疑問も残る。シシ垣の構造(木柵・土塁・石塁)、耕地に関わる自然条件、生業や労働の形態、築造主体などについての東日本と西日本との比較は、東西日本文化論としても興味深い。

第2章(港 誠吾)は、香川県小豆島を対象とした、シシ垣遺構の実測調査報告である。例えば土庄町内全域の遺構は、総延長46km以上に及ぶという。シシ垣の圍繞形態が、集落の境界を越えて連なる「連続形」、主に山奥の特定範囲を囲む「独立環状形」、半島を完全に横断する「横断形」の3つに類型化されている。シシ垣や落とし穴の実測図は臨場感に溢れ、昭和初期のシシ垣分布図の原図も貴重である。

第3章(中野朝生)は、三重県紀北町におけるシシ垣と獣害の実状について、十数名の古老への聞き取りと近世文書にもとづき紹介する。

第4章(蛭原一平)は、沖縄県西表島を事例

に、シシ垣築造の歴史的背景、遺構の位置や構造などを報告する。事例3ヵ所の遺構はいずれも半島全体を横断しており、第2章でいう「横断形」と判断し得る。

第5章（白井忠雄・石庭孫義）は、滋賀県高島市を事例に、遺構の実測結果や関連史料を示す。木柵・土塁・石塁の他に竹柵の実例が示され、シシ垣の築造と維持は村落共同体の重要事項であったことも強調されている。

第6章（佐竹 昭）は、広島県呉市の内平集落^{うちひら}を事例に、遺構の圍繞形態と構造、さらに近世における築造当時の状況を示す。近世の広島藩領の島嶼部における人口増加が、耕地開墾の増大に繋がり、既存の野生動物との衝突を招いたと指摘する。耕地後退に伴う現在の獣害とは逆の現象であり、獣害が発生する前線地帯は、時代によって大きく変動してきたことを示唆する指摘といえる。

次に第2部では、シシ垣の保存と活用という観点から、各地の遺構の状況と、遺構に対する住民の意識や関わり方が述べられる。

第7章（高橋春成）は、滋賀県大津市の荒川集落を事例とした、詳細な報告である。当地のシシ垣は水害・土石流対策を兼ねて複数集落を一括していたという事実、シシ垣の出入口であった「木戸口」に関する諸資料、シシ垣を乗り越えるシカの実写などが、特に興味深い。さらに、混住化が進む荒川の旧住民・新住民を対象に、シシ垣の解説資料を見せる前と見せた後という2段階のアンケートを行い、シシ垣の価値や保存に関する住民への啓発効果を検討する。

第8章（金田平太郎）は、岐阜県根尾谷を事例とした異色の章であり、地形学者である著者が、総延長約75kmにわたるシシ垣の土塁を、活断層の崖と誤認した経験を語る。著者はこの経験を逆手にとり、土塁のずれの有無やその程度を観察することで、過去の地震活動の規模などを知り得ることを指摘する。

第9章（姉崎智子）は、群馬県の市町村誌の記載から、県内のシシ垣の分布や実状を示す。シシ垣の築造実験も行い、長さ約5m、高さ約1.5mの土塁を造るのに、18m³の土、大人5名と機械2.5台の労働力、7時間の作業量を要したとの具体的数値は貴重である。

第10章（宮城邦昌）は、沖縄県国頭村の奥集落

に残る1938（昭和13）年の『大垣台帳』を資料として、当時のシシ垣の垣数・全長・所有者などを示す。当時の村落社会構造を知る上でも重要な資料である。土、石、サンゴ、木、竹などの多様な材質を組み合わせ、様々な種類のシシ垣の断面図も興味深い。

第11章（北川博正）は、福井県大野市・勝山市および岐阜県郡上市の3集落を事例に、遺構の状況やイノシシの歴史、シシ垣を訪ねるエコツアーについて紹介する。

第12章（谷口隆一・高橋順之・高橋春成）は、滋賀県米原市の2集落を事例に、地元住民と外部者との協同による、シシ垣の地域振興への活用例を報告する。村おこし活動ともリンクさせながら、「第一回シシ垣サミット」の開催地として全国的に注目を集めるに至った、苦闘の記録でもある。

さらに第3部では、シシ垣の実際の調査方法について、主に自然科学の視点から検討される。評者が最も興味を持って読んだ部分である。

第13章（金田平太郎）は、第8章を受け、シシ垣と誤認しやすい自然地形の実例と、両者の見分け方について解説する。この際に注意すべきなのは、自然地形を利用したシシ垣の存在であるという。最新の航空レーザー測量によるシシ垣の遺構写真は、非常に鮮明で印象的である。

第14章（越智淳平）は、大分県佐伯市の4集落を事例に、考古学的視点から遺構の構造を解析する。石塁の段割と石積、土塁の断面と成分（プラント・オパールや花粉など）を分析し、シシ垣の築造過程を推定している。さらに、圍繞の領域、使用石材、築造主体の3点から、シシ垣を8つに類型化する。

最後に第4部では、シシ垣の現代版といえる防護柵の普及と効果について、政策担当者の立場から現状が報告される。

第15章（金森弘樹）は、島根県全域を事例に、集落単位での広域防護柵（電気柵やワイヤーメッシュ柵など）が実際に高い効果を挙げていることを示し、優良集落の事例も紹介する。ほぼ集落全体を取り囲むような総延長でも、1ヵ月の電気代は300～1,000円程度で済むといい、一般に想像されるより遥かに安価である。

第16章（寺本憲之）は、獣害防止効果の高い集

落単位での広域防護柵を普及させるために、住民内部の利害調整と意見集約の方策について考察する。滋賀県近江八幡市・日野町の2集落を、広域防護柵の設置例として紹介している。

以上の他に、各部の末尾には、熊野古道（高橋春成）、農村の里山イベント（三浦美香）、猪堀の遺跡（角田清美）、現代の都市生活（石井 亘）に焦点を当てたコラムも置かれ、読者がシシ垣を身近に感じることができるよう配慮されている。

本書は、各章の間で記述や構成に精粗の差があり、既発表文献の一部を再構成した箇所も含まれる。したがって、研究書というよりは啓蒙書としての性格が強く、地域振興や獣害防止の実践例として学ぶべき点が多い。例えば、第7章や第12章にみるように、シシ垣という一見地味な過去の建造物を文化財として昇華させ、農山村振興における研究者の関わり方の模範例を示している。これは、イノシシをはじめとする野生動物の生態を長年追い続け¹⁾、シシ垣についても実地調査を蓄積してきた²⁾、編者ゆえに可能になった事柄であろう。歴史地理学における体系的なシシ垣研究の先駆者としては、本書の分担執筆者でもある矢ヶ崎孝雄³⁾を挙げねばならないが、本書は、その視野を現代社会との関わりにまで広げた点でも評価し得る。

本書の第1部と第2部の各章では、シシ垣の長さ・高さ・構造など、多数の具体的なデータが示されているが、本書全体を通じた各地域（各章）の比較や、そこから導出される共通性あるいは地域性を示すような、まとめに当たる章がない点は惜しまれる。さらに、そのような各章間での比較の前提となる用語統一が、必ずしも厳密ではない。例えば、シシをイノシシ・シカ・カモシカなどの総称とする編者の定義とはやや異なり、シシをイノシシのみに限定して論じた章もある。また、シシ垣の「形態」という用語が指す内容も、各章によって差がある。シシ垣の材質・築造法・圍繞形態などは、各章でも示唆されているように、その地域の自然地理的条件や民俗技術と密接に関連していると考えられ、文化地理学の立場か

らも考察を深める余地が大きい。

今後の課題となるのは、広域防護柵の成功例を、他地域にいかに応用するかという点である。第4部で示唆されるように、防護柵は、集落の耕地が比較的狭域に集中し、かつ防護柵の定期的な点検・補修が可能な場合には有効である。評者の知る長崎県平戸島の例では、耕地が林野の合間を縫って広く散在し、さらにイノシシが対岸の九州本土から海を渡って海岸からも侵入するため⁴⁾、耕地一枚ごとを高さ30cm程度の電気柵で囲っているものの、効果には限界があるという。85歳のある古老は、丹精込めて作った木製防護柵のたった1つの破損箇所からイノシシに頻繁に侵入され、補修する余力もないため、被害をただ眺めるしかないという。各地域の条件に応じた防護方法の改善は、困難であるが重要な課題である。

農山村の獣害問題は、今や全国的な社会問題となっており、本書はこの問題にシシ垣という歴史的景観の面からアプローチした点でも、学際的に価値が高い。

（今里悟之）

〔注〕

- 1) 高橋春成『野生動物と野生化家畜』大明堂、1995、13-72頁。
- 2) 高橋春成『生きもの秘境のたび—地球上いたるところにロマンあり』ナカニシヤ出版、2008、105-121頁。同『人と生き物の地理改訂版』古今書院、2010、90-121頁。
- 3) 矢ヶ崎孝雄「猪垣にみるイノシシとの攻防—近世日本における諸相」、高橋春成編『イノシシと人間—共に生きる』古今書院、2001、122-170頁。本稿では、シシ垣の研究史も概観されている。
- 4) イノシシが海を渡る事例として、編者は奄美諸島の事例を報告しているが、海を渡る理由については、狩猟者に追われた結果と推測している。高橋春成「海を泳ぐイノシシ—イカを釣りに行って、イノシシを捕って帰る」、同編『イノシシと人間—共に生きる』古今書院、2001、221-243頁。